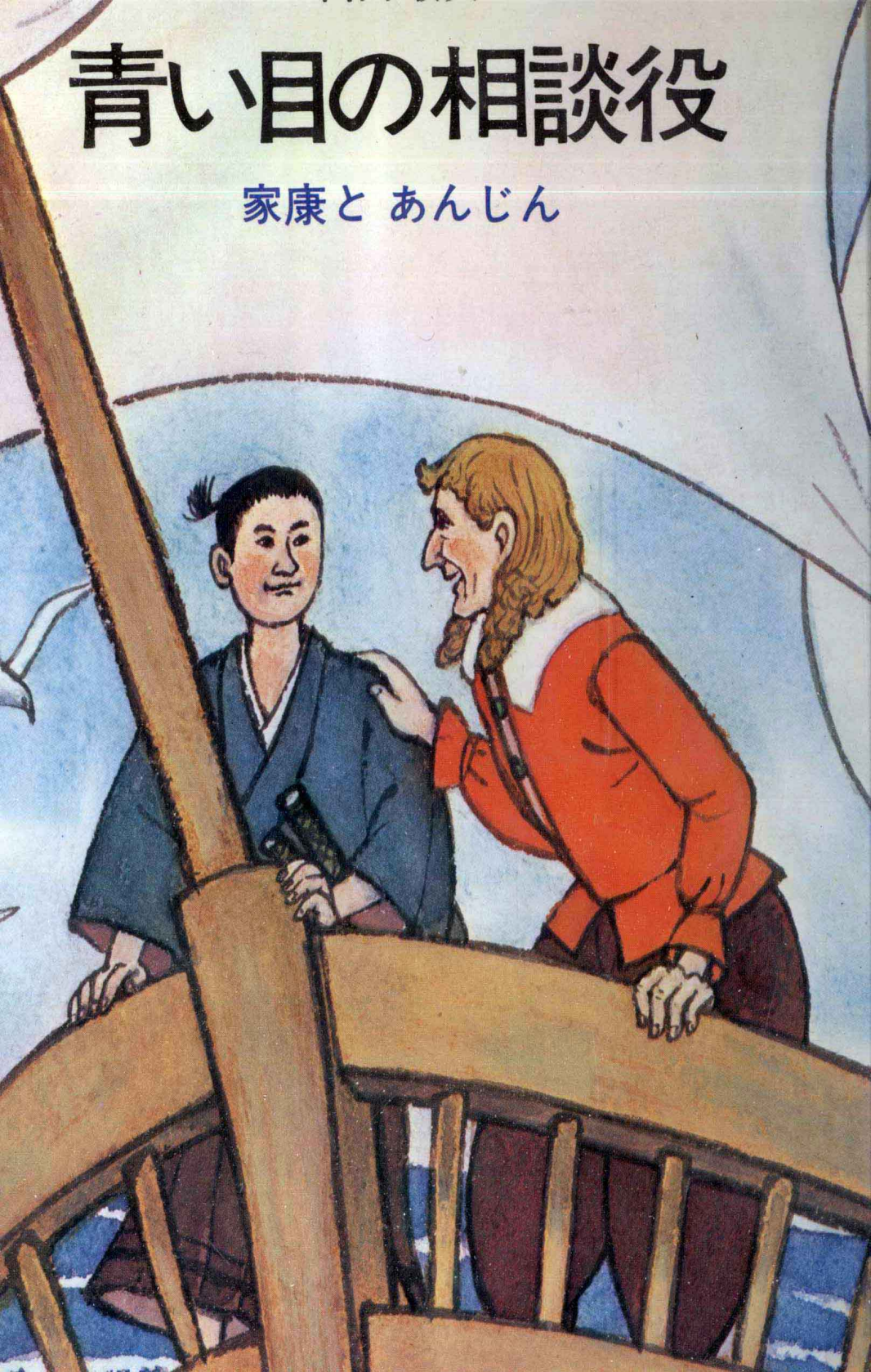


青い目の相談役

家康と あんじん



西山 敏夫

青い目の相談役

家康と あんじん



さ・え・ら 書房

著者略歴 明治38年横浜市に生まれる。昭和5年早大高
師部国漢科卒業。33年小学館文学賞をうける。著書には
「お父さんの船」「おらんだ焼」「ぎんのさかな」など。
日本児童文芸家協会会員。

日本史の目

青い目の相談役 一家康とあんじん一

昭和49年3月 第1刷発行

昭和57年1月 第7刷発行

著者 にし やま とし お 西山 敏夫

発行者 浦城 光郷

印刷 須藤 印刷

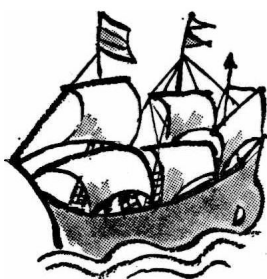
製本 協栄 製本

発行所 さ・え・ら書房
東京都新宿区市谷砂土原町3丁目1
振替東京4-87244 電話03(268)4261

©1974 Toshio Nishiyama

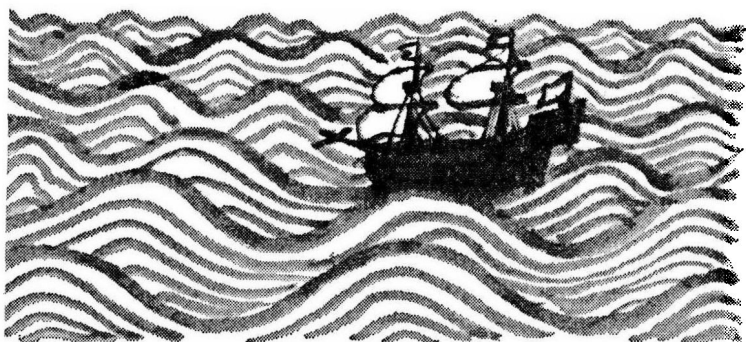
NDC 210

ISBN4-378-02012-2



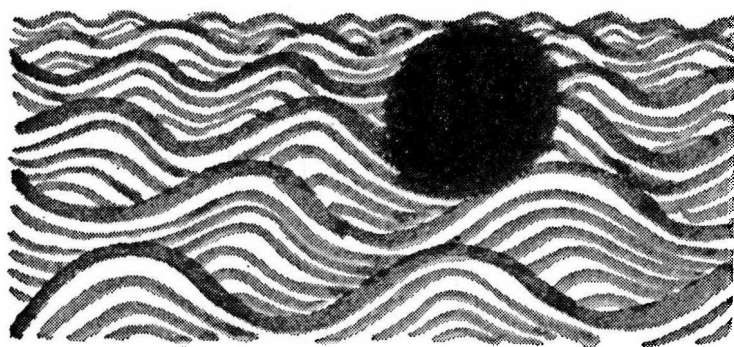
青い目の相談役

家康と あんじん



もくじ

1	陣屋にきた異国人……………	五
2	ロッテルダムから豊後へ……………	一六
3	りっぱな按針じゃ……………	三三
4	無敵艦隊……………	四四
5	伊東の浜の船づくり……………	五五
6	オランダ商館……………	六六
7	流れついたイスパニア船……………	七七
8	キリスト教禁止令……………	八八
9	北西航路……………	九九
10	祖国をゆめ見て……………	一〇〇



11	大坂冬の陣、夏の陣……………	一四九
12	シヤムへの航海……………	一五〇
13	最後の会見……………	一六九
14	海のかなた……………	一七二

あとがき……………	二〇四
三浦按針*年表……………	二〇六
さくいん……………	二二

装画／久保雅勇



この物語は、徳川家康に世界の^{たいせい}大勢

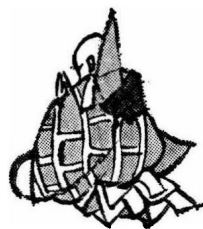
を語り、ヨーロッパの科学を説明した

ウィリアム・アダムスと親しかった、

海野助次^{うんのすけじ}老人の思い出ばなしです。



1 陣屋にきた異国人



わたくしが、アダムスさんとはじめて出会ったのは、慶長五年（一六〇〇）、夏のおわりのことで、わたくしが十三のときでした。

その日、早朝、わたくしは、祖父と浜の漁師なかま数人と、江戸の隅田川べりの向井さまのお屋敷へ魚をとどけにいきました。まえの晩に浦賀の沖でとれた魚を、舟のいけすに入れてはこんでいったのです。

このとき、祖父はご用人から、

「帰りの舟に、人をひとり、いっしょに乗せていってくれ。」

と、たのまれました。

だが、その人は一刻（二時間）ほどのちにくるので、それまで待ってくれというのです。

そこで、わたくしは、二つ年上の幸吉さんにつれだって、町見物に出かけました。わたくしが、江戸にきたのははじめてだったからです。

浦賀とちがつて、人が大ぜいいるのと、店屋が多いのおどろきました。神田山の薬師堂にくると、お堂の前に、人があふれるようにおりました。

のぞくと、からだのがつしりと大きな坊さんが、護摩をたいて祈禱をしているのでした。そばの人に、なんのご祈禱をしているのかと聞くと、その人は話してくれました。

坊さんは、武蔵・川越にある喜多院の天海という人でした。

大坂（いまの大阪）で石田三成が西国の大名をさそつて兵をあげたので、家康公は、これと戦うために、上方へむかうことになりました。坊さんは、家康公によって天下がおだやかにおさまるやうにと、数日まえから、昼夜、祈っているのだということでした。

暗いお堂のなかに護摩の火はあかあかと燃え、けむりは、外の木立のあいだを流れていました。わたくしたちが向井さまのお屋敷にもどると、まもなく、ご用人が、舟に乗せていく人をつれてきました。その人を見ると、茶色いかみの毛を肩までのぼした、青い目の背の高い異国人でした。

向井さまの浦賀の陣屋には、豊後に漂着して、浦賀の港につれられてきた、オランダ船の人たちが二十人近くも暮らしています。わたくしが、ああ、あの人たちのうちのひとりなんだなと思っていますと、ご用人が、

「ウィリアム・アダムスさんというイギリスの人だ。ご陣屋までつれていってあげてくれ。」と、いいました。



帰りは、風のぐあいがよく、ろを使わないで、帆でゆくことができました。

異国の人は、舟の中で、なにもいわずに、だまって、帆柱の下横板に腰をかけていました。たっぷりしたも引きのようなものをはいた長い脚をきゅうくつそうにして、ひざをたてていました。上着は、前をつきあわせにしまるい金具でとめた、そでの細い胴着のようなものを着ていました。暑いので、とめ金具をはずしています。

わたくしは、こんなに身近に、異国人を見るのははじめてなので、見ないではいられませんでした。でも、草色がかかった水色の目玉は、なにか気味わるく思えました。

夕がた、浦賀につきました。

みんなで、その人を、向井さまの陣屋までおくって行ってあげました。その人は、やわらかな声で「サンキュー」といって、腰をかがめると、前で見あげていたわたくしの手をにぎって、

「ありがと、ありがと。」

と、いいました。

なにかこわかった青い目が、やさしく見えました。わたくしは、「サンキュー」というのは、ありがたうということ、おなじなんだなと思いました。

数日たって、岬のがけ下の浜で、なにか変わったことがおこるらしいというので、わたくしはいつてみました。ほかの人たちも出てきました。

砂浜^{すなはま}には、黒いふとい筒^{つつ}のようなものが、台にのせておいてありました。よく見ると、港につないであつた、オランダ船の上のつていた、大砲^{たいほう}とかいうものでした。

そのまわりには、向井^{むかい}さまのご家来^{けらい}にまじつて、大きなからだの異国人^{いこくじん}が十人あまりいました。

そのなかには、このあいだいっしょの船で江戸^{えど}から帰つてきた、ウィリアム・アダムスさんもいました。

アダムスさんは、ご家来^{けらい}たちに、なにかおしえているようでした。異国人^{いこくじん}たちが、箱^{はこ}の中らなにかをだして、筒^{つつ}の中に入れたり、棒^{ぼう}でおしこんだりしているのを、ご家来^{けらい}たちが、めずらしそうに、のぞいたりいじつたりしていました。

わたくしたちが遠まきにして見ていると、顔見知りのご家来^{けらい}がきて、

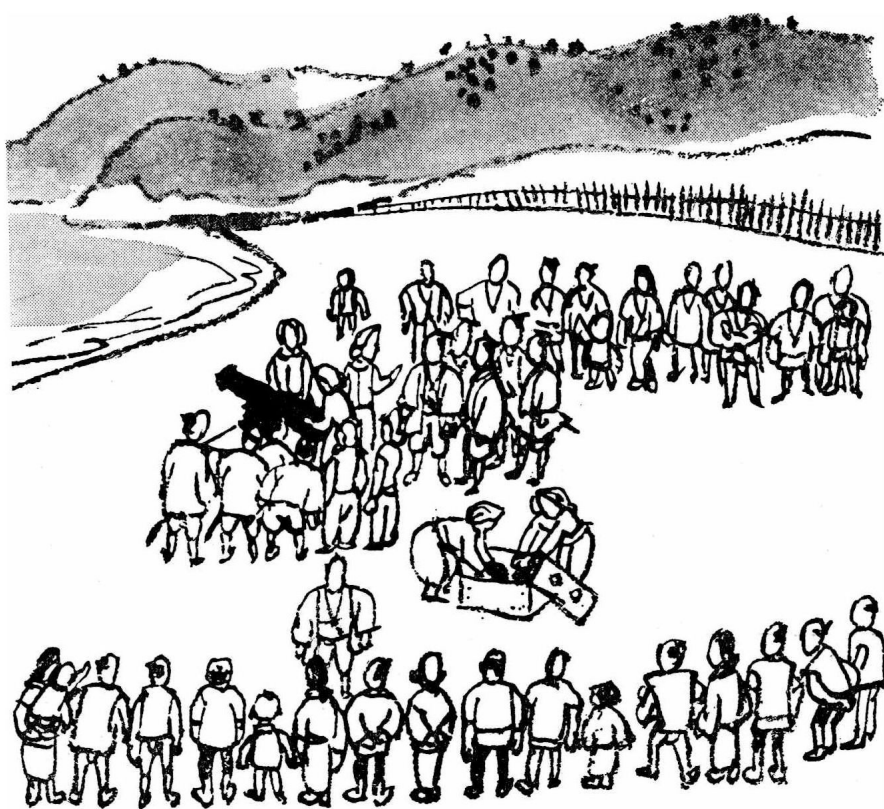
「大きな音がするから、耳をふさいでおれ」

と、いいました。

そこで、みんなは、両耳を指でふさいで見ていました。

ふたりだけが、大砲^{たいほう}の根もとにのこつて、ほかの人たちは、すこしはなれた砂^{すな}の上に腰^{こし}をおろしました。

まもなく、海の方をむいた筒^{つつ}さきから火がとびだし、ドーンと、空がさけるような大きな音がしました。そして、はるか沖^{おき}の方で、水けむりがあがりました。



ためしうちをしたのでしょう。

二、三発うってすんでしまうと、また、みんな、大砲たいほうのまわりにあつまって、いじったりさわったりしていました。

やがて、ご家来や異人いじんたちで、台ごともちあげて、陣屋じんやの方へはこんでいきました。

わたくしは、大砲をよく見ようと、あとからついていき、とうとう陣屋までいってしまいました。中にははいれないので、さくのあいだからのぞいていると、うしろから肩かたをたたかれてびっくりしました。

しかられるのかと思ってふりか



えると、ウィリアム・アダムスさんが、にこにこして立っていました。

アダムスさんは、このあいだとおなじように手をさしだしました。そこで、わたくしも、手をだしてにぎりかえました。

アダムスさんは、親しみのこもった目でわたくしの顔を見ながら、

「おやしき、どちら。」と、いいました。

おやしきといわれて、わたくしはめんくうりましたが、わたくしの家はどこかと、たずねているのだとわかったので、うなずいて見

せてから、あるきだしました。

小みちの両がわには、赤まんまや河原^{かわら}なでしこがかわいらしくさいていました。アダムスさんは、わたくしに足どりをあわせて、ゆっくりあるいていました。

小高い雑木^{ぞうき}のしげったがけをまわると、わたくしの家の前庭が、目の前にあらわれました。ちょうど、祖父^{そふ}が、網^{あみ}をひろげてしらべていました。今夜漁^{りよう}に出るしたくをしていたのです。

「こんにちは」

アダムスさんは、祖父のそばまでいって、ゆっくりと節^{ふし}をつけてそういうと、にっこりして、手をさしだしました。

祖父は、てれくさそうでしたが、やっぱり手をだして、にぎりあいしました。

わたくしの両親も、そして祖母^{そぼ}も亡^なくなってしまっていたので、家事は、すぐとなりに住んでいる祖父のいちばん下の妹、わたくしには大叔母^{おば}にあたる人が、やってきては、用意してくれていました。年がわりあい^{わふ}に若いので、わたくしはおばさんとよんでいました。

だれがきたのかと、自分の家から出てきたおばさんは、異国^{いこく}人と手をにぎりあっている祖父を見て、びっくりしたようでした。でも、祖父が、

「おふさ、このあいだ話した、お陣屋^{じんや}にいなさる、オランダ船^{ぶね}のかただよ」

という、わかってますよというような顔でうなずいて、腰^{こし}をかがめました。

「さあ、さあ、どうぞ。上よりも、かえって、ここのほうがいいでしょうね。腰こしかけてください。」お婆さんは、ひとりでにぎやかにしゃべりながら、土間どまのあがりがまちに、ござをしきました。アダムスさんは、ことばはわからなくても、気持ちを通じたのでしょう、ござの敷物しきものに腰をかけました。

「ちょうどよかった、助次すけじが帰ってきたら食べさせようと思って、井戸いどへひやしといたウリがある。」お婆さんはそういつて、ウリをもつてくると、切つて、それぞれにとつてくれました。わたくしは、こっちがお客によばれて食べているような、よそゆきのような気がしました。

おたがいにことばがわからないので、話はできません。けれど、ウリをわけあつて食べたことになにかうちとけたような気持ちになりました。

わたくしはアダムスさんと家のまわりをあるいたり、畑をこえて浜はまのほうへいたりしました。このとき、わたくしは、イギリス語で大船をシップ、小舟こぶねをボートということをおぼえました。

その日から、ときどき、アダムスさんは、わたくしの家へあそびにきました。食事をしていくこともありました。

わたくしは、お寺の方丈ほうじょう（住職じゆしやく）さまから、字をならっていました。祖父そふは、わたくしがお婆えがよいと方丈さまがおっしゃったと、よろこんでいました。

「異国いこくのことばがわかるのはけっこうなことだ。助次すけじはお婆えがいいのだから、いっしょうけんめ

いやりな。あの人にも、せいぜい、こっちのことばをおしえてあげるんだな。」

祖父にいわれなくても、わたくしはそのつもりでいました。アダムスさんも、やっぱりそうだったと思います。

そんなことで、海へでてつりをしても、山へ鳥やウサギをつかまえにいつても、おたがいに、そばから名まえをおぼえていきました。

こうしているうちに、江戸の家康公が軍勢をひきいて、西にむかったという話を聞きました。陣屋の異人さんのなかには、この軍勢にくわわっていった人もあるということでした。あの太砲をうつ人たちです。

九月の末のことでした。

九月十五日に美濃（いまの岐阜県）の関が原というところで大合戦があつて、家康公のひきいる東軍が、西軍をさんざんにうち負かしたということが、陣屋から浜のものたちに知らされました。

「神田の薬師堂で、天海さまというあのお坊さんがご祈禱していたように、これで、いくさが、みんなおしまいになってくれたらいい。」

祖父は、いろいろの前にあぐらをかいて、おばさんにそういつていました。

浦賀には、海賊衆（かいぞくしゅう）といって、小田原の北条さまの水軍がありました。太閤秀吉さまに小田原城がせめられたとき、わたくしの父は、海賊衆の舟子（かこ）にかりだされて、小田原沖のいくさにでました。